OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>野口栄子著「ロココの装飾」岩崎美術社,1988年1月
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 190-191
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィア博物館，ウヘルスケ・フラディシチェのチェコスロヴァキア博物館，チチマヌイの博物館とウヘルスケ・フラディシチェの制作現場での報告である。

Ⅲの装飾技法は松本るり江氏によるもので，まず，一般的な技法について述べられ，以下，千里の国立民族博物館の所蔵になる26点の衣装の調査記録が述べられている。

以上，目次を追って記したが，中嶋氏は文献を示していて，同じ道の研究者にとって便利である。羽生氏は「チェコスロヴァキアの民族服が現代に生きのびているのは，民俗を残そうとする努力の結果であるとともに，異文化を自在に取り入れながら，時代の変化に対応してきた身軽さにある」との指摘は重要な視点といえよう。松本氏の調査は国立民族博物館に出向く時にはぜひ同伴したいという思いをもつ。

野口栄子著
「ロココの装飾」

岩崎美術社，1988年１月

昨年（1987）８月，「芸術新潮」が「気になるロココ」という特輯記事を組んでいた。そこで「なぜロココか」の見出しで「後世から軽薄短少と見られたロココが，実はそれまでの，いかにも人間らしい，人間くさいヨーロッパ文化の最後の総仕上げの時代という素顔を持っていたということを見落してはいけない」と述べている。

野口栄子氏の「ロココの装飾」は如上のように，時宜をえた出版といえよう。「今みんなの眼がインテリアに向いている。と言っても，職場で企業の能率を高めるための室内空間ではない。もっとプライベートな『遊びの空間』一人一人が自分なりの好みを生かし，自由に振舞い，遊ぶためのインテリアである」と飯塚信雄氏がのべているとおり，個人生活のために，ロココの復活が叫ばれているおり「ロココの装飾」は意味がある。

本書はインテリア装飾の図版群ではじめられている。Ⅰルイ14世時代（図１～13），Ⅱ摂政時代・ルイ15世時代（図14～136），Ⅲルイ16世時代（図137～152）の３つに分けられ，Ⅱの項がもっとも多い。この分類はあとの本文の内容ともつながっている。本文の方は，①はじめに―ロココとは，②18世紀概観，③ロココの国際様式，④ロココの起源，⑤アラベスク文様とグロテスク文様，⑥摂政時代とパレ・ロワイアル，⑦パレ・ロワイアルとオップノール，⑧ルイ15世の時代，⑨ブーシェとシノワズリー，⑩古典様式の台頭，⑪ルイ16世様式，⑫サロンと髪形，⑬おわり，の13項に分けて説明がなされている。全体を通読してロココの意味の概要をくみとることもできるし，個々の項目を興味にしたがってひろい読みすることもできる。また，ロココの主役はマリー・アントワネット王妃ではなく，マダム・ポンパドゥール夫人であることを知れば，興味は一層深くなろう。

本書での図版はすべて白黒で統一されていて，細部を調べるには親切な配慮といえ，そこに意味があるのかもし知れないが，素人にはわずかでもカラー版で見せてほしい気がしないでもない、

蛇足を加えると，芸術新潮でも，また私の記憶でも，オテル・ド・スービーズと思っていたが，最近のミシュランのギード・ヴェールにはパレ・スービーズと記してある。

（元井　能）